

直腸ガンから回復した北村誠氏の治療経過

昭和13（1938）年4月9日生まれ、北村誠氏は、1999年8月ごろより排便障害があり、12月初旬には肛門よりの出血を認めた。そのため、12月14日、国立療養所富士病院を受診し、精査したところ直腸ガンと診断されている。2000年2月21日、直腸ガンの手術（低位前方切除術）を同病院にて施行され、3月6日退院。

01年3月にはガンが肺に転移し、同時に慢性C型肝炎も併発していた。6月22日に行なわれた腫瘍マーカー検査ではCEA 3.0 ng/ml （基準値 5.0 以下）、CA19-9が 94.8 U/ml （基準値 34.0 以下）と、CA19-9という腫瘍マーカーが異常値を示していた。しかし、C型肝炎と肝臓ガンにより肝機能もGOT 179 IU/L （基準値 $1 \sim 40$ ）、GPT 135 IU/L （基準値 $1 \sim 35$ ）、 $\gamma\text{-GTP}$ 40 IU/L （基準値 $1 \sim 40$ ）と異常値を示していたため、肝臓に負担をかける抗ガン剤を投与されることはなかった。

いくらガンが肺に転移してしようと、腫瘍マーカーが異常値を示そうと、抗ガン剤を投与されてしまえば、免疫機能はますます低下し、ガンはより進行、治癒はより困難となる。むしろ彼にとって、肝機能障害があつたために抗ガン剤を投与されずに済み、命拾いをしたとも考えられる。彼の職業は、有機農法による農場の経営である。もともと化学薬品を人体に投与することについては反対の意見をもっており、以前から不完全ながらも玄米食をしていた。

彼が当院を受診したのは、2001年7月11日。そのときの波動測定結果は、次のようである。

この時期は、まだハナビラタケを当院での代替医療に導入してはいなかった。

基準測定値	免疫機能 (B222)	ストレス (E222)	ガン (F005)	白血病 (E433)	うつ病 (E216)
EM-X	-21	-21	-21	-21	-21
バランスα	-19	-19	-19	-19	-20
714-X	-16	-18	-17	-17	-18
黒グルミ外殻チンキ	-18	-17	-14	-19	-17
ニガヨモギ	-18	-17	-17	-19	-16
丁字	-19	-18	-17	-17	-18
薬草三種	-19	-20	-17	-18	-19
薬草三種と714-X 及びバランスα	-18	-13	-15	-19	-19

表からもわかるように、この患者さんにとって治病上有効なもの、つまり基準測定値より高い測定値を示すものは、補助的抗酸化物質であるバランスα、714-X、そして黒グルミ外殻チンキ、ニガヨモギ、丁字の薬草三種であった。また、これらすべてを患者さんの手に持たせ測定した値が左端に示されているが、免疫機能、ストレス、ガン、白血病、うつ病のすべての測定項目で波動測定値を向上させている。

したがって、この患者さんには薬草三種と714-Xおよびバランスαを投与することにした。

7月11日の血液検査では、GOT 60（基準値1～40）、GPT 55（1～35）、γ-GTP 68（1～60）、CEA 5・0（5・0以下）、CA 19-9が66・1（34以下）を示し、国立療養所富士病院で行なわれた検査データよりも改善されていた。

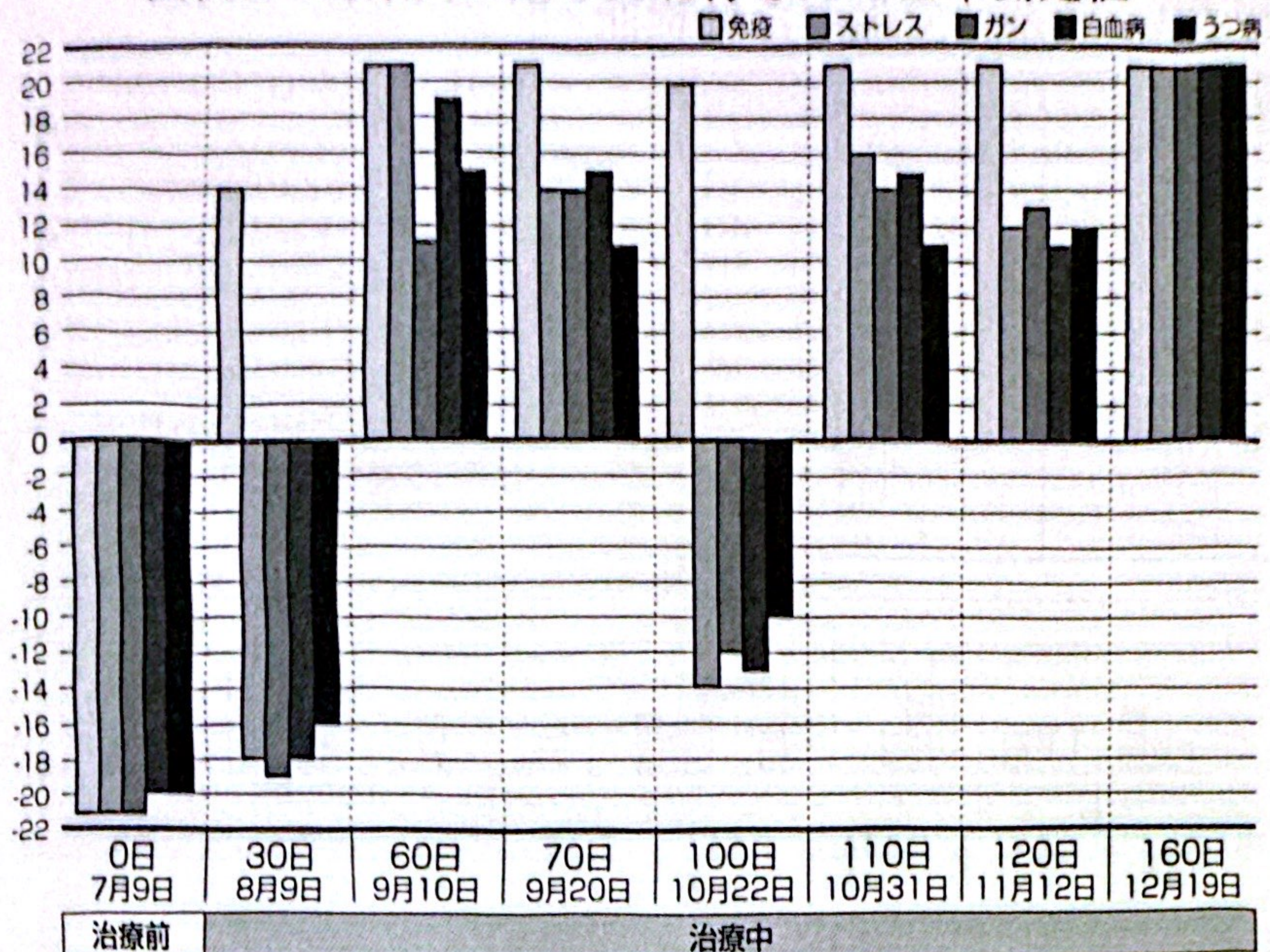
2001年7月26日より同年12月21日まで当院で入院治療をしたが、彼自身、病氣治療に非常な熱意を示し、パソコンを駆使し、入院中に行なった検査データをまとめ上げていた。

次に示す図表1、2、3は、彼が作製したものである。

図表1は治療前と治療中の波動測定値（基準測定値）の変化を棒グラフで表している。治療前の7月9日の基準測定値は先の表で示したものと同じであり、すべての測定項目における波動測定値は、-21もしくは-20であった。治療開始後30日の8月9日には、免疫機能のみがプラスに転換しており、治療開始後60日、70日と時間が経過するにつれ、すべての測定項目で波動測定値がプラスの領域に入っている。

しかし治療開始後100日目では、免疫機能のみプラスのまま、その他の測定項目で測定値は、再びマイナスの領域にある。そして治療開始後110日目、120日目には、またすべての波動測定項目の測定値がプラスの領域にあり、160日目にはすべての波動測定項目で測定値は+21となっている。この+21という波動値を、今後とも維持していくことができるのであれば、ガンはいずれ完治すると彼には説明した。

図表1. 時系列に追った北村さんの基準測定値



治療開始後100日目の排毒現象がはっきりと表れている。

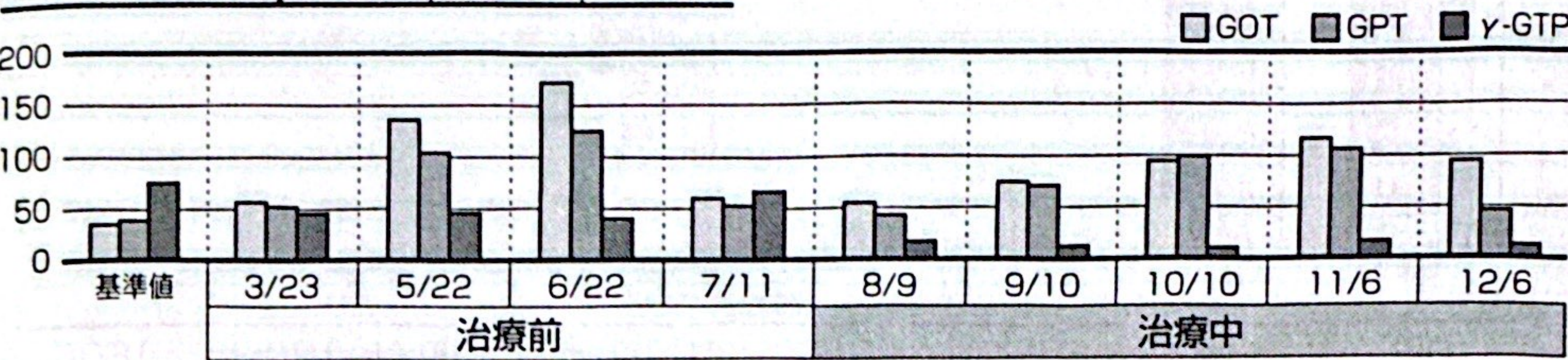
読者の中には、治療開始後100日目だけ免疫機能以外の測定項目がマイナス値になっていることを、不思議に思う向きもあるかもしれない。しかしこの変化こそ、東洋医学でいうところの「好転反応」あるいは「瞑眩」という排毒現象であると考えられる。免疫機能が高まり、人体がさかんに排毒をした結果、その毒素の影響で、ほかの測定項目の測定値が低下するのである。ほかのガン患者の治療過程でも、しばしば見られる現象である。

図表2（次頁）は治療前、治療中の肝機能の変化を示している。左側に示されている棒グラフが基準値であり、これと比較してGOT、GPT、γ-GTPの値を見ていただきたい。治療中もこれらの値は不安定でまだ基準値内におさまってはいないところを見ると、生体の排毒現象がつづけられているものと考えられる。

図表2. 時系列で追った肝機能

検査日	GOT	GPT	γ-GTP
基準値	38	43	75
3月23日	57	52	45
5月22日	143	105	45
6月22日	179	135	40
7月11日	60	55	68
8月 9日	54	42	18
9月10日	78	75	12
10月10日	95	100	11
11月 6日	127	111	17
12月 6日	97	47	13

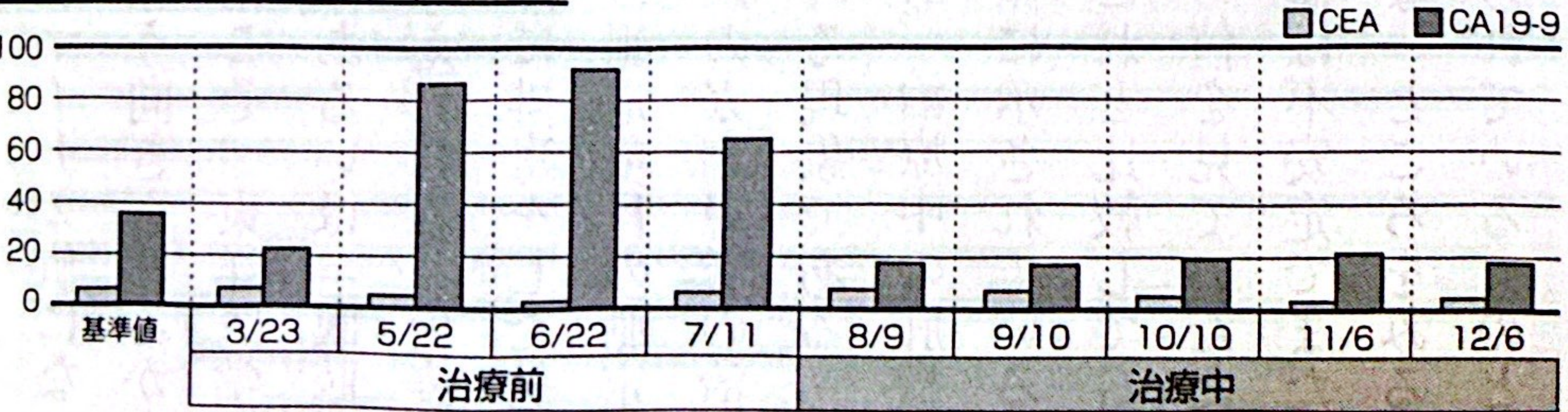
GOT、GPT、γ-GTPは代表的なトランスアミナーゼ(アミノ基転移酵素)で、肝炎などの肝臓疾患があると、血液中で上昇する。これらが異常値を示すと、現代医学では肝底護剤やステロイドホルモン剤などを投与して対処しようとするが、結果的に人体の免疫力を低下させ、病気をかえって進行させてしまう。



図表3. 時系列で追った腫瘍マーカー

検査日	CEA	CA19-9
基準値	5	37
3月23日	5.3	22.8
5月22日	4.3	86
6月22日	3	94.8
7月11日	5	66.1
8月 9日	6.2	19
9月10日	5.3	18
10月10日	4.9	20
11月 6日	3.1	22
12月 6日	4.3	19

腫瘍マーカーとは、ガン細胞が作り出す物質で、それを組織、細胞、体液、または排泄物中に検出し、ガンの存在、ガン細胞の種類、および進行度を知るうえでの目安としている。



図表3は、二種の腫瘍マーカーCEAとCA19-9の変化を示した棒グラフである。左側に基準値が示されている。治療前と比較すると、この治療により、二種の腫瘍マーカーは基準値内に回復している。もちろんこの治療中に抗ガン剤は使用しておらず、玄米菜食と前述した補助的治療用材のみの投与だけで、このような回復が見られるのである。

現代医学では、ガン患者の腫瘍マーカーが異常高値を示すと、すぐに抗ガン剤を投与する。抗ガン剤を投与すれば、たしかに腫瘍マーカーの値を一時的に回復させることはできるが、同時に免疫機能や諸臓器機能などを低下させてしまうため、ガンはより進行していき、いずれまた腫瘍マーカーの値は異常値を示すようになるのは必至である。

当院を退院したあと、彼は富士山麓でアイガモ農法によるコメの栽培や無農薬有機農業に毎日精を出し、元気で自由な人生を送っている。

ハナビラタケを使用する場合も、波動測定装置を用い、ハナビラタケがこれを投与される患者さんの波動を向上させることが確認できたのちに活用するのなら、今ここで紹介した北村氏にもたらされたような治病効果が得られるのである。しかし、これも玄米菜食を実践した上での効果であることはいうまでもない。

健康状態が一目瞭然の「生体血液細胞分析検査」

生体血液細胞分析検査は、アメリカで生まれたもので、H・E・S (Health Education System)